

王道楽土の終焉

岩手県 千葉 六郎

昭和十四年から私は満州国政府職員・鉄道警護隊員で国内の鉄道の安全輸送及び重要軍事物（駅舎、鉄橋、トンネル等）の警護及び鉄道沿線五キロ以内の治安維持の目的をもって勤務していた。

昭和十九年三月、満州国の機構改革で文官から武官に編成替えとなった。

翌二十年七月、満州国錦州旅団管内にソ連の不逞分子が侵入、鉄道及び重要軍事物の破壊が目的である旨の情報が有り、七月下旬、錦州旅団本部に到着し、指示を受け、直ちに古北口警護団に配属となり、樂平県庁所在地の樂平駅分団駐在となった。鉄道輸送と住民の安全等の警護と警備の任にあたった。

八月十四日午後、古北口警護団長から分団長宛に緊急命令が入った旨の連絡に接した。命令は「派遣隊員

は現地を撤収の上最寄りの列車で錦州本団に引揚げるべし」とのことであった。当時私は小隊長として、部下数十人をもって沿線警戒にあたっており、午後四時頃は全員が集合し、直ちに出発準備にとりかかったが、肝心の列車は到着せず、いらいらしながら待機していたところ、午後五時過ぎ、「現地分団長は、機密文書及び通信機器を処分すべし、一般居留民をして派遣団員共ども古北口団に集結すべし」とのことであった。われわれも文書焼却処分をし、部落から馬車三台を借りあげ、夜を待つて出発することとした。時に夜十時頃であった。全員約三十数人となり、兩夜のこと、思うような行動はできない。途中敵にも会うことなく、夜半十二時は過ぎていたと思うが、古北口警護団に到着した。馬車に積んだ銃器弾薬等は団長に返納する。団長の話によると、満鉄は全く不通となり、本団に戻るのには不可能である、とのこと従って北支・北京鉄道宛に救援を求めているので暫く待機しているようにとのことであった。翌日、翌々日と武器の点検、および乗車編成作業等、実に緊迫した状況でもあった。八

月十七日に至り、救援列車が到着となり、十八日、一般居留民を安全車両に、団員は武装して前後に乗車、錦州本団に向かうこととなった。何せ国境を越えての行動であり、計画通りには行かず、北京・天津・山海関を迂回して、どうにか三十一日、奏皇島まで辿り着いたのであるが、満州国と北支那との境界地なので、ここを越えれば錦州であり、目と鼻の先に至って暫し立ち往生の状態となった。十月四日昼頃になり、米軍一個大隊が上陸し、日本軍及び居留民は米軍の指示で行動することとなり、米軍は特に強圧をかけるわけではなく、予想以上に寛大であった。翌五日夕刻、日本軍および一般居留民は北支唐山に移動することとなり、われわれは別行動をとり、天津に居留し、現地居留民団に加えてもらうことと決定し、天津貨物廠内に收容された。十二月二十日過ぎ、帰還命令が出て、塘沽港より乗船、博多港に帰還となった。思えば王道楽土、日滿一徳一心として満州建国に努力の甲斐もなく、ついに終戦となったのである。

私の満州での戦争体験

岩手県 佐藤 高彌

昭和二十年八月九日、ソ連軍はソ満国境を越えて各方面からなだれこんできた。

四月に、妻と二歳の長男を佳木斯の社宅に残し、満鉄が新設した駅助役科生として、六か月の卒業予定でハルビン鉄道教習所に入所中にソ連軍の侵入となった。

私は不運にも当時盲腸炎で入院手術し退院直後の身で宿舍で静養中だった。

日ソ東部国境地帯において交戦中、詳細不明であるが教習所長から全員集合の指示をうけた。十一日にくりあげ卒業式を行い、所属地に戻るようになった。時すでにおそし、留守家族との連絡は通信途絶え、やむなく私はハルビン列車区に緊急勤務にされて、その日から早速勤務について構内を歩いているうちに偶然に